

## おいたち

こんにちは。

小田急線新百合ヶ丘駅から徒歩15分の閑静な住宅街の自宅でエステサロン Amamiliya アマミリヤを経営しております。河野ありさ と申します。

年齢は40代後半ですが、年齢に合わない派手な名前はとても気に入っています。

ありさ という名前は母がつけたと聞いております。誕生日は12月15日で4人兄弟の3番目として静岡県清水市（現在は静岡市）で生まれました。はじめは有紗という漢字の名前があったのですが、紗の字が当時の人名漢字にないということを経営最後の日に市役所の窓口でわかり、とっさに平仮名になってしまったそうです。

ひよんなことから平仮名になってしまった名前ですが、人から覚えやすく、誰にでも読める、また20年ほど前に、観月ありさ さんがでてきたことで、子供のころ周りから珍しがられていた私の名前もようやく市民権を得ました。

実家は店舗内装業をやっておりました。

母も事務をしておりましたので、とても忙しくてなにかを気軽に頼める雰囲気ではありませんでしたが、授業参観日の前の日だけは特別でした。

「明日はこの服を着てきてね。」

その当時 40 代の母はとても若く見えたうえに着るものも派手でしたから、みんなの目を引いたのです。

当日母が教室のドアを開けた瞬間のみんなのざわめきのようなものを感じるのが好きでした。

4 人の子を持ち仕事もしていて、とても忙しい母でしたが、いつもお化粧品をしていて、身なりもきちんとしていました。参観が終わってからは、必ず「ありさのお母さんってすごい派手だけどきれいだよね」などと言われると、とても快感だったのを覚えています。

そんな母を見ていたこともあって、いつしか私のなかで、どんなに忙しくても綺麗にしていようという気持ちが芽生えていたのだと思います。

## OL 時代

18 歳の時、東京の短大に進学するのを機に親元を離れ、卒業後は旅行会社に就職しました。

旅行は好きでしたが、自分が旅行するのと事務仕事をするのとは全く違っていて、とにかく忙しかったです。

毎日お客様の切符の手配や飛行機の座席の販売などを行い、充実感はありましたが、忙しすぎて体調を崩してしまうこともしばしばありました。

まだバブル時代でしたので、短大の同級生たちは、年に 200 万円洋服代にかけ、次の年には着ないで捨てるとか、食費は一日 1 万円などという話を耳にしながらも、私は洋服を買ったりなにかを習いにいったり、エステに行ったりする時間がなく、ただひたすら日々の仕事におわれる毎日でした。

若さにかまけて肌のお手入れもそこそこに多忙な生活を続けていたので、先ほどお伝えした私の「いつでも綺麗にしている」という理想とは裏腹に肌はボロボロ、服も買いに行けないような状態になってしまいました。

そんな忙しい生活に疲れが出始めたころ、同期入社の中の夫

と結婚するため、私が転職することになり、忙しい旅行会社とはさよならしたのでした。

次に行った会社は、アメリカ系のソフト会社で、ソフトのマニュアルの日本語版を一太郎で作成しながら、受付業務を行うというのが私の仕事でした。こちらはとても暇な会社で、朝出社してから 5 時までなにをしようかと悩んでしまうほどでした。

暇な勤務が終わって念願だった習い事をしてもまだまだ時間があり、旅行会社にいる時にあれほど自由な時間が欲しかったはずなのに、なにかもの足りなさを感じていました。

この会社には 2 年ほどお世話になり、そろそろ子供がほしいと考え始めたころ退社し、無事に 2 男 1 女の母となりました。

## **エステと出会うきっかけは大人ニキビ**

母となってからは、母業一色で、食事の支度から着るものまで、手を抜くことなく毎日忙しく過ごしていました。

そんな中、一番下の子が生まれたのと同時に夫が名古屋に転

勤になり、行ったこともない名古屋の地での生活が始まりました。

名古屋での生活が2年経ったとき、また夫が東京に異動になり、慌ただしく引越しの準備をし始めたころ、引越しによるストレスなのか？ポツポツと頬にニキビが出始めてしまいました。最初は少しだったニキビがとても気になり触ってしまったりして、あごにもおでこにも広がり、いい大人なのに顔中ニキビだらけになってしまったのです。

こんな顔でもともと住んでいた新百合ヶ丘に帰ってもみんなに会えない。早くこの顔をどうにかしなければなどと思えば思うほどに焦りがつのり、雑誌に載っている化粧品を買ってみたり、これでニキビが治ったという話を聞けば実行してみたり、いろいろ試してはみるものの、努力とは裏腹にどんどん顔のニキビはひどくなっていきました。

そんな中、ニキビを治したい一心で試してみようと思った方法のひとつにエステがあり、初めてのエステ体験に行きました。

そこは最初にお化粧品を買って、お手入れのときは自分の化粧品をエステティシャンが使うという方式で、最初は3万円ほどかかりましたが、藁をもすがる気持ちでお手入れをお願いしました。

おすすめの基本コースをお願いし、初めてデコルテまでを含むフェイシャルマッサージを受けました。

その時の衝撃は今でも忘れられません。まるで雲の中に身体を浮かべているような心地よさ、世の中にこんなに気持ちいいものがあるものかと感激し、今までなぜこれほどまでに気持ちいいことをしてこなかったのかと後悔もしました。

それから月に一度のエステ通いが始まり、ニキビの方は半年ほど経ったころ自然に改善していきました。

## **パリでの衝撃と後悔**

名古屋から新百合ヶ丘に戻って5年ほど経ったころ、突然夫にパリへ転勤命令がでました。

これにはさすがに同行するのか迷いました。上の子は中2で一緒に行けば高校はどうなるのか？何年くらいなのか？な

どとひたすら考えても答えがでず、ただ予想で動くしかない上にビザの関係で、家族が同行するのかどうか2週間ほどで返事を出さなければなりませんでした。

悩んだ挙句、長男の大学受験を機に家族は帰国しようという結論に達し、同行することに決めました。

それから半年あまりの準備期間ののち、親子4人で先に行っている夫が住むパリへと出発しました。

パリに渡ったころは慣れない生活の中、子供の学校のことなどでしばらくは忙しい日々を送り、少し落ち着いたあとは家事や子供の送迎の合間にひとりでブラブラ行く観光に明け暮れ、きままなパリでの生活を満喫したのですが、それもひと段落すると何とも言えない空虚な日々が待っていました。毎日子供の送迎、一連の家事や日本人の友達とお茶をする以外別段することもなく、朝起きると今日一日なにをして過ごそうか？と悩む日々がつづいたのでした。

そんな時、夫が勤務先から持ち帰った日本人向けの地方誌OVNIを読んでいた時のことです。

紙面の下に小さな枠でいろんな人がだしている広告にクギ

付けになりました。

「着付けいたします〇〇ユーロ」

「フラワーアレンジメントします〇〇ユーロ」

「出張カットします〇〇ユーロ」

こんな感じで非常に小さな広告ですが、みんな異国の地で自分のスキルを生かし、それぞれの仕事をしているのです。

私は日本でOLを経て結婚し子供を産み、普通に一生懸命生きてきたつもりですが、なにひとつひと様から胸を張ってお金をちょうだいできる技術がなかったのです。

手に技術さえあればどんなところに行っても仕事ができる。

人の役にたてる。そんな単純なことを異国の地で身をもって知りました。

なにもない自分が情けなく、このまま歳をとってしまふことに不安を覚えるのと同時に、なにもしてこなかった自分を激しく悔やみました。

## 突然の帰国

なにも技術がないことを後悔した私は、なにかパリで技術を



身に付けて、帰国したときに仕事にしようと思い、平凡な毎日の中にもそのなにかを見つけることは常に頭において生活していました。

しかし、そのなにかを見つけることができないまま、またしても突然夫に帰国命令がでました。

パリでの生活は予想に反し1年で終了を迎え、瞬く間にまた日本に戻ることになりました。

再び引越しや子供たちの学校のことなどで慌ただしく帰国し、生活が落ち着くと、私はこれからの仕事を以前自分が行くのが好きだったエステに焦点をおきました。

## **エステの世界へ**

私は、毎週発行される求人誌やネットで、とりあえずエステと名がつくところに片っ端から電話をかけ、履歴書を送りました。

ところが、経験もない家庭も持っている、40代の私を雇ってくれるところなどどこにもありません。

あきらめかけていたころ全国展開している温浴施設から、

「研修に行ってそこで合格できたら採用です。」という言葉  
をいただき、

「とにかくやってみよう。」

と思い、研修の期間とされていた間にもともとはいていた  
私用をその日のうちにすべてキャンセルし、留守中の家事は  
娘にお願いし、毎日都内に通う準備に取り掛かりました。

その研修がどんなに大変なものかも知らずに.....

## つらい研修

研修は都内の研修センターで毎日行われ、全国から集まった  
同期8人で研修がスタートしました。年齢は20代30代が  
中心で、40代は私ひとりでした。

研修終了後、合格すればまた全国のサロンに散らばっていく  
というシステムです。

私は、毎朝8時までにはほとんどの家事を済ませ、満員電車に  
乗り、自宅から一時間以上かけて研修センターに向かいまし  
た。

アロマトリートメントやフェイシャルの理論と実技の授業

を主に受け、事前に用意するように言われていたビキニに毎日着替えて二人ひと組でトリートメントの練習です。

その日習ったことはその日に習得しなければどんどんおいていかれてしまう、そんなハードなカリキュラムでした。

同期の中でもダントツに年齢が上の私は、明らかに覚えが悪い上、手も動かず、初日から劣等生になってしまいました。

エステの表側しか知らなかった私は、エステの裏側にこんなにも沢山の洗濯物があることに驚き、休憩時間もおびただしい洗濯ものの処理で休む暇などなく、気がつけば終了時間の夜8時に。

「いつ先生にリタイヤを告げて家族のもとに帰ろうか。」

最初の3日間はそんなことをいつも考えながら過ごしていたように思います。

そんな不安な気持ちを持った劣等生の胸中を察してか、私は時々先生から呼び出しを受け

「河野さん、やる気あるの？全然手順を覚えられないし、滑舌も悪いし、接客業やったことないでしょ？大丈夫？」

などと厳しいことを言い、私の本気度をチェックしていまし

た。

そんな厳しいことを言われても、とにかく、エステの世界に入るきっかけを掴んだのは確かで、そのきっかけを手放すことは簡単ですが、それをしてしまうと応援してくれている夫に顔むけができず、また母としても子供達にえらそうなことをなにも言えなくなってしまう。第一に、自分自身が一番後悔すると思い、先生からの問いにはいつもこう答えていました。

「頑張りますので、最後まで続けさせてください。」

研修期間に何度も先生にリタイヤを告げようと思いましたが、それをしなかったのは、私の中の専業主婦から抜け出したいという思いの方が勝ったからだと思います。

毎日毎日ビキニに着替え、トリートメントの練習、アロマオイルの勉強、接客マナー、お客様へのお声かけ、気配り、準備から片付け、一日があっという間に過ぎていってしまいました。

日が経つにつれ、ひとり遅れをとっていた私ですが、そんな私を若い同期たちは見捨てませんでした。

初めて会った時から同期たちは口々に

「みんなで合格しようね。」とか「みんなで受かるといいね。」  
といつも言っていて、思いやりがある子達が多くて内心よか  
ったと思っていたのですが、まさかここまでしてくれるとは思  
っていなかったのです。

研修は夜8時までですが、10時までは練習をしてもいいこ  
とになっていました。みんな連日の研修でへとへとに疲れ、  
一刻も早く家に帰って休みたかったはずですが、でも、劣等生  
の私のために練習をチェックしてくれ、トリートメントの練  
習台のために残ってくれたのです。

あの時、彼女たちがいなければ、彼女たちと同期にならなけ  
れば、今の私はないと断言できます。

毎日ギリギリの10時まで練習をしてから家に帰り、娘がで  
きなかつた家事を片付け、テーブルをベッドにみたてて夫の  
身体で練習。また翌朝出かける。そんな毎日がつづき、とう  
とう試験の前日になってしまいました。

その時です。またしても先生からの呼び出しです。

「河野さん、このままでは不合格です。もし不合格の場合は

どうしますか？」

真夏の研修センターの屋上で、先生にこう告げられ、私は心の中で叫びました。

「明日の本番で規定通りのトリートメントを50分で終えなければ不合格ということぐらいわかっています！」

頭では十分にわかっていたのですが、内心はとても焦っていました。

「やはり自分には向いていないんじゃないのか？この年齢でなにかをはじめると無理があったのか？」

そんな私の不安をついた先生からのきつい質問にとっさに私の口からでた言葉は、

「受かるまでまた次の期に来させてください。お願いします。」

なぜだかわかりませんが、そう答えながら涙が頬をつたったのを覚えています。

「わかりました。それでは明日頑張ってください。」

そう言って先生は去っていきました。

いよいよ試験です。重要な要素は、「お客様と会話をしながら笑顔でトリートメントを50分で。」でした。

ところが、私は一度もトリートメントを時間内に終えたことがないので、自信などあるはずもありません。

極度の緊張で課題の笑顔はひきつり、お客様との会話もしどろもどろ。でもなぜかトリートメントだけはスムーズに行きました。よくスポーツ選手が「神が降りてきた」という言葉を口にしますが、まさにその時私の元に神が降りてきたのです。

「できた！」

今まで何度練習しても一度も規定通りの時間に終わったことがないトリートメントを、試験当日ぴったりの時間で終わることができ、本当に自分でも驚きました。

「これできっと合格だよ」

と一緒に頑張ってきた同期たちは励ましてくれましたが、発表までの数時間は不安で押しつぶされそうになっていました。

そして、とうとう夕方の発表の時間になりました。

発表は成績のいい順で名前を呼ばれるという噂で、同期たちの名前が次々に呼ばれていきました。

「やっぱりダメか？もうおしまいかな？」

諦めかけていたその時、

「河野ありささん」

とうとう最後に私の名前が呼ばれたのです。

名前を呼ばれた瞬間、人目もはばからずいい大人が泣いてしまい、先生が今後のスケジュールを説明している声もほとんど聞けない状態になっていました。

本当に嬉しかったです。今までの努力が報われたのです。

その後のフェイシャルの試験は慣れもあり、すんなり合格することができ、いよいよ店舗デビューです。

## **エステの仕事に就いて**

職場は研修に行く前にあらかじめ決められていた自宅近くの温泉施設内のエステルームでした。

温泉施設内でしたので、予約はアロマトリートメントが圧倒



的に多かったです。

予約と予約の間は20分しかなく、その間にお客様に着替えていただき、お茶をお出しし、次のお客様の準備をしてお出迎えをしなければならず、研修の時にあれほどまでに時間うるさく言われた意味がようやく理解できました。

フェイシャルを受けられるお客様はリラクゼーション目的の方がほとんどでしたが、中には本当にお肌のことで悩んでいる方もいらっしゃいました。

そんな中、私の中である疑問が浮かんできました。

「私はエステの仕事はしているけれど、はたして自分がエステティシャンと呼べるのだろうか？お肌のことで悩んでいるお客様に適切なアドバイスを差し上げてこそ本当のエステティシャンではないのか？」

そして私は

「なにか全国で通用する資格を取ってもっともっと勉強しよう。」

と漠然と考えるようになっていきましたが、仕事と家事に追われ、ただただ時間が過ぎていきました。

そんな時、比較的帰りが早かった夫がかなり頻繁に海外出張にでる部署に異動になってしまいました。それまでなんとか子供達だけで夜を過ごすことがないように、夫婦で相談しながら仕事に行っていたのですが、それができなくなってしまったのです。

問題は遅番でした。まだ一番下の子が小学生だったので、温浴施設が閉店する夜中まで子供たちだけで留守番をさせることに躊躇してしまい、大好きな職場でしたが去る決心をしました。

次の職場は多少なりとも経験があったのですぐに見つかりました。

今度は主に脱毛とフェイシャルのサロンです。

私は、バブル期のかかなり痛くて高額な脱毛方法を友達から聞いていたので、今の痛くない美肌効果のある脱毛を知った時は大変驚きました。

脱毛を受けられた方の毛がどんどん弱々しくなっていき、減っていくのです。それに脱毛したところの肌は見違えるほど

ツヤツヤしています。

今まで毛で悩んでいた方が来店するたびに

「お手入れが楽になってよかったわ。」とか

「もっと早くくればよかった。」と言って笑顔で帰っていく

姿を見てとても嬉しく思いました。

## **E 先生との出会い**

新たなサロンで働き出したある時、スタッフのお友達で日本エステティック業協会の試験官をしていらっしゃる E さんという方にお会いする機会がありました。

その E さんから、

「これからこの道で仕事をしていくつもりなら、もっともっと勉強して試験を受けなさい」

と言われました。

「これだ！」

以前から考えていた全国的に通用する資格を取れば堂々と私はエステティシャンだと言えるようになります。今から勉強すれば今年の筆記試験に間に合うかもしれない。

私はその日のうちにテキストを取り寄せて勉強を始めました。

### **あこがれのエステティシャンに**

真剣に受験勉強したのは何年ぶりでしょうか？もう記憶にないほど久しぶりで、勉強し慣れていないせいか、10分前に読んだことは10分後には忘れてしまう。そんな情けない状態でスタートしました。

私は、家事や仕事の合間にマーカーだらけのテキストを反復読みし、夏休みに親戚達と海に行くのも実家に行くのにもテキスト持参で、暇さえあれば勉強し、どうにか試験に間に合わせました。

その勉強の甲斐あって試験が終わったと同時に合格を確信し、次の実技試験にのぞみました。

実技の方は日々やっていることでしたので、すんなりと合格し、ついに私はエステの仕事をしているから日本エステティック業協会認定の上級エステティシャンになったのです。

## 独立開業へ

あこがれのエステティシャンになることができ、今まで以上に張り切って仕事に打ち込んでいたときです。

オーナーから、突然のリストラを告げられました。

サロンがあまりうまくいっていなかったというのが原因で、当時のスタッフは全員辞めることになってしまいました。

せっかく見つけた職場なのにまた就職活動するのかなと思うとちょっと気が滅入っていたその時、同僚から唐突に言われました。

「河野さん、自宅で独立したら？」

「え？私が自宅で？」

突然の言葉に初めは全く現実味を帯びていませんでしたが、よく考えてみると、自宅でなら家のことも今まで通りできるし、なんとと言っても家賃がかからない分、トリートメント代を安くすることができ、普通の主婦でもエステに来ていただける。こんなにすばらしいものを一部の余裕のある女性だけで味わうのはもったいないので、リーズナブルな価格のサロンを私が作ろうと思いたちました。

私はいつも「美しくなるには継続することが重要です」と言っています。日々のお手入れはもちろんのこと、エステでのスペシャルケアも続けることで結果がでてきます。でも、継続するにはお金がかかります。人によってエステにかけられる予算も時間もちがいますが、家賃がかからない分をトリートメント代で還元することができるため、お客様の幅が広がると考えました。そして、今までエステがほど遠かった方にも来ていただけるサロンを目指し、開業いたしました。

**アマミリヤ**というサロン名は、家族の名前を一文字ずつとりました。今、私がこうして好きな仕事をしていただけるのも家族の支えがあつてのことだと思ふからです。

研修中、いやな顔ひとつせず私を送り出してくれた夫、家事を手伝ってくれた長女、そっと見守ってくれた長男、応援してくれた次男。本当にありがとう。

これから

これから Amamiliya アマミリヤは地域の方たちに愛され気軽に通えるサロンをめざし、日々進化していきたいと思っています。自分にあったペース、予算で永く通うことが美しさにつながっていくと信じていますので、どうか無理せず永く来ていただきたいのです。

Amamiliya アマミリヤに来ることを楽しみにしている。きれいになるのを実感できる。そんな方がひとりでも増えるように心から願っています。

これからもどうぞ Amamiliya アマミリヤをよろしく願いいたします。